# つながる世界

立石　俊夫

一九九一年八月十六日、私は中国シルクロード、星星峡から続く一一〇キロメートルの完全ダート道を走っていた。朝六時、蛤蜜（ハミ）を出発して敦煌に着いたのは夜の九時四十五分、十四時間走ったことになる。

なぜシルクロードをバイクで走ることになったのか。

一九七七年四月、大学の入学手続きの列に並んでいた私に「今日三時、部室に来てみませんか。」と声をかけてきた人がいた。この人こそ、今の今まで続いている私の趣味の世界を拓くきっかけを与えてくれた人だった。私に勧誘の声をかける人が少なかったこともあり「部室へどうぞ。」という誘いをとても嬉しく感じたのを覚えている。

部室は、工学部裏の日の当たらないところにあった。木造の小屋からあまり聞いたこ

とのない、しかし、澄んだそして余分なもののない音が聞こえていた。「部」は邦楽部だった（箏・三絃・尺八の演奏を学ぶ部活）。一段上がったところに古い畳が敷かれており、見たこともない楽器の前で女性が絃を爪弾き、その奥で、これもまた見たことのない笛を吹く男性が数人いた。

その日から部室へ行く日が幾日か続いたけれど、言われるままに息を吹き込んでみても全く音の出ない楽器に私は疲れていき、部として教えてもらっていた個人教授（月謝二千円だったと思う）先生宅に通う日数も次第に少なくなり、部室へ行く足も遠のいていく。

そんな私を繋ぎとめてくれたのは、「部室へ。」と誘ってくれたあの先輩Sさんだった。時に私の下宿を訪ね、「銭湯へ行こう。」「飯を食べに行こう。」「パチンコ行くかい？」と。

いつ邦楽部をやめてもおかしくない私の転機となったのは、河口湖畔常在寺で行われた夏合宿だったと思う（四月に入部希望のあった新入生二十数人のうち夏合宿に行ったのはたった五人）。真夏の一週間全員でお寺に泊まりこみ、自炊、楽器演奏の稽古に明け暮れる。朝は六時起床、湖畔をランニングした後、稽古、朝食後稽古、昼食をはさん

で稽古、夕食の後夜九時まで稽古となる。稽古は基本先輩と一対一の対面稽古である。当然のことながら稽古中は正座。一日九時間も正座の日々が続くと、楽器の演奏より足の痛さの方に気持ちがいくのは言うまでもない。特に辛かったのは、近くの神社の参道の石畳で正座して稽古する時間だった。稽古してくれる先輩もさぞやたいへんだったはずだ。合宿五日目くらいになると、私は幻覚を見るようになった。寝ていても風呂に入っていても、天井の木の模様や風呂の天井が「尺八の楽符」に見えた。先輩に、「天井に楽符が書いてあります。今まで合宿してきた先輩たちが書いていったんですか？」と聞いて、先輩を訝がらせた。合宿最終日、全員の前で合宿成果の演奏をすることになっていた。その課題曲「六段の調べ」演奏時間七分三〇秒。私は、初めからおわりまで、一度も音が出なかった。半世紀を経た今でも昨日のことのように覚えている。出たのは大量の汗ばかり。

信玄公軍旗「風林火山」の旗が収められている雲峰寺での冬合宿を経て、和楽器演奏一年の節目を迎えた。よくやめなかったものだ。

二年目から、個人教授をしてくれている先生の誘いで、日曜日の度に県内の寺々を訪

ね、仏前で「古典本曲」を演奏する「献奏会」に参加するようになり、社会人の方々と関わることになった。そんな中、床屋さんのHさんが私たち学生をお宅に招いてくれた。そして、長年愛用している楽器を私に安価で譲ってくれるという。私は、アルバイトをしたお金でその和楽器「尺八」を譲り受けた。半世紀たった今だから分かる、Hさんにとって長年愛用してきた楽器を手放すことは大きな決断だったと思う。ありがたかった。

大学三年になった時、同学年で部に残っているのは、一年目の夏合宿に参加した五人。男は二人のみ。部長となった。私は、その日から一年間、雨の日も風の日もどんなに雪が積もっても、体調が思わしくない日も、どんなことがあっても一日一回は尺八を吹いた。昔の大学は出入りが自由の教室があった。真夜中の空き教室で毎日毎日吹いた。

一年目、Sさんが、そして部の同僚、先輩が私を支えてくれた。二年目、同じ趣味にいそしむ社会人「働く人々」の姿が私の背中を押した。三年目、頂いた楽器で吹く音が私にやる気を与えた。日々自分の出す音のちがいと変化に耳をすませた。なんとしてもうまくなりたいと思った。

転勤のある職に就いてからも、各地で教えてくれる師匠を探しながら演奏を続けてい

た私にとって、Sさんと同等またはそれ以上の大きな出会いが訪れる。十歳年上のKさんとの出会いは、私の世界を大きく広げた。演奏の中身も変えるきっかけを頂いた。Kさんは都内の大学で尺八を始め、プロに師事しつつ、地元に帰ってからもずっと地域で演奏活動を続けていた。地域の仲間とともに演奏していた。私はその輪に入れて頂いた。決して愛好者が多いとはいえない和楽器。決してポピュラーとはいえない邦楽の世界にあって、Kさんを中心とする人々は、楽しみながら、地道な活動を続けながら、地方の会館ホール（長野県伊那文化会館・大ホール一三〇〇席程）の客席を満員にするような邦楽だけの演奏会を十年以上続けるという「偉業」をなし遂げていた。

コンサートは、毎年一月に行われた。前年の秋口から準備が始まり、当日が近くなると毎土日曜日また平日の夜に練習を重ねた。多い時は、出演者は四十人以上、殆どが社会人であった。日々の仕事を持ちながらのコンサート練習はさぞや大変だったと思うが、皆生き生きとしてエネルギーにあふれていたように思う。演奏を支えてくれるスタッフの力も大きかった。舞台さん、音響さん、舞台監督さん、舞台をつくってくれる楽器屋さん。皆がすばらしいコンサートをつくりあげようとしていた。みんなの気持ちがしっ

かりとつながっていたと思う。コンサートをつくりあげていく過程で、時には難しい問題や検討課題が起きて緊張した空気になることもあったと思う。そんな時でもKさんは、温かかった。演奏がうまくいかない時も誰かをきつく攻めるようなことは一度もしなかった。

社会に出て二十年目、私は仕事上の悩みで夜もよく眠れず精神的に参ってしまい職場に行けない日々が続くことになる。そんな時コンサートへ向けての練習の時間が、私にとって心安らぐ時間となった。辛い気持ちを忘れさせてくれる空間と時間があった。悩みを打ち明けたわけではない。コンサートに向かってエネルギーを持って進む仲間と、皆を包み込むようなKさんと過ごす時間が私を癒していったように思う。私にエネルギーを与えてくれたように思う。みんなと音楽を奏でて、ステージをつくっていくことが純粋に楽しかった。音楽が自分を助けてくれているように思った。本当にありがたかった。

もうひとつ。

高校二年生の春、父に「オートバイ通学をしたい。」と頼んだことがある。父は、私

を連れて町のバイク店へ行き、中古のホンダを私に与えてくれた（八万円だったと思う）。内心心配な気持ちがあったはずなのに一言も苦言はなかった。信州の冬は寒く道路は凍る。通学に都合のよい電車がなかったこともあり、私は真冬でも父の買ってくれたオートバイで通学した。ありがたかった。

時間をみつけて、日本の各地をツーリングした。能登半島。若狭湾。京都。岩手県遠野。九州天草。バイク雑誌の編集長やカメラマンの方と取材旅行もさせて頂いた。オートバイは私の世界を広げてくれた。ありがたかった。

そして、ある日。「和楽器」と「オートバイ」が交差し、つながった。

定期購読していたバイク雑誌のお知らせ欄に小さく「シルクロードツーリング　ライダーおよびスタッフ募集」の案内。「一九九一年八月に中国シルクロード一六三〇キロメートルをオートバイで走る」という大きなイベント企画だった。「西暦二〇〇〇年を目標に文化・スポーツ等様々な分野において、国内外を問わず多くの人々の参加による国境を越えた民間交流実現事業」のひとつであった。参加には条件があった。「中シルクロードの地で人々がつながり合うために、君は何ができるか。」「この旅であなたは、

何をしたいのか。」が参加応募選考の内容であったと思う。私は「シルクロードで尺八を吹きたい。」と書いた。互いの信頼は、互いの理解から始まると考えていたからだ。遥か昔大陸から伝来してきた笛が現在の尺八のもととなった。大げさに言えば何千年の時と何千キロの距離と空間を越えて今の尺八の音がある。数え切れない人々の手を経て、私が吹いているこの楽器がある。そう思うと嬉しかった。

一九九一年六月三日午後一時五十分、私は「参加決定の電話」を受けとることになる。そして、同年八月八日北京人民大会堂と同十一日新疆ウイグル自治区ウルムチ人民会堂で演奏させて頂いた。現地の演奏家と交流させて頂いた。歴史の人々が行き交ったシルクロードを走らせて頂いた。ありがたかった。

私は今年六十五歳となる。人生を青春・朱夏・白秋・玄冬と四期に分けるとしたら、すでに「白秋」だろうか。「和楽器尺八演奏」と「オートバイ」は、私に多くの貴い出会いとつながりを与えてくれた。広がりを与えてくれた。すばらしい人々とすばらしい時間、すばらしい空間との出会い、そしてつながり。ありがたかった。

「玄冬」にさしかかる今年、新しい自分を求めて、母が長年やっていた「木目込み人

形つくり」を始めようと思っている。

二〇二三年二月二十五日　信州にて記す